

NO. 323

じゅんあい

平成26（2013）年2月1日

## 証人の群れ



高山右近像（高栞砂夜子画）

【こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびた<sup>しょうにん</sup>だしい証人の群れ<sup>む</sup>に<sup>から</sup>囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく<sup>つみ</sup>罪をかなぐり捨てて、自分

に定められている競争を忍耐強く走り抜こうではありませんか、信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。

このイエスは、御自身の前にある喜びを捨て、恥をもいとわないで十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右にお座りになったのです。

あなたがたが、気力を失い疲れ果ててしまわないように、御自分に対する罪人たちのこのような反抗を忍耐された方のことを、よく考えなさい。】

(新約聖書 ヘブライ 12章)

天国は証人の群れの集う主の備えられた所といえよう。そして証人とは殉教者と同意語である。

【あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。

そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。】 (新約聖書 使徒言行録 1章)

この聖霊は殉教の霊と解釈することも出来よう。十字架の贖いによって、主のために殉教をもいとわないおびたしい証人の群れを生み出された。

【小羊が第五の封印を開いたとき、神の言葉と自分たちがたてた証しのために殺された人々の魂を、わたしは祭壇の下に見た。

彼らは大声でこう叫んだ。「真実で聖なる主よ、いつまで裁きを行わず、地に住む者にわたしたちの血の復讐をなさないのですか。」

すると、その一人一人に、白い衣が与えられ、また、自分たちと同じように殺されようとしている兄弟であり、仲間の僕である者たちの数が満ちるまで、なお、しばらく静かに待つようにと告げられた。】

(新約聖書 黙示録 6章)

要約すれば殉教者の数が満たされるまで・・・となる。

あゝ天国は、殉教の心を持った人々によって構成される所といえよう。

最初の殉教者ステファノの顔は天使のようであった。

【人々が石を投げつけている間、ステファノは主に呼びかけて、「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」と言った。

それから、ひざまずいて、「主よ、この罪を彼らに<sup>お</sup>負わせないでください」と大声で叫んだ。ステファノはこう言って、眠りについた。】

(使徒言行録 7章) と。

このステファノの姿はキリストの十字架上で祈りの姿と同じであったことを見逃すことは出来ない。ステファノの殉教は一人の若者<sup>のち</sup>サウロの心<sup>よういん</sup>に大きな光を投げかけ、後にキリストへと結びつく大きな要因となった。

【イエスはこうお答えになった。

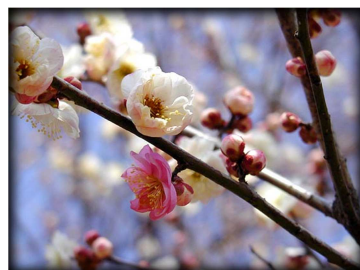
「人の子が<sup>えいこう</sup>栄光を受ける時が来た。はっきり  
言うておく。

一粒<sup>つぶ</sup>の麦は、地に落ちて死ななければ、  
一粒のままである。

だが、死ねば、多くの実を結ぶ。

自分の命を愛する者は、それを失うが、

この世で自分の命を<sup>にく</sup>憎む人は、それを保<sup>たも</sup>って永遠<sup>いた</sup>の命に至る】



(ヨハネ 12章)

一粒の麦の<sup>ぎせい</sup>犠牲<sup>ふっかつ</sup>と復活！ これこそ人々を救うためにキリストの通る道であった。

【それから、弟子<sup>でし</sup>たちに言われた。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに<sup>したが</sup>従いなさい。

自分の命を救<sup>すく</sup>いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを<sup>え</sup>得る。

人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の<sup>とく</sup>得があろうか。自分の命を<sup>だいか</sup>買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。】

(マタイ 16章)

“自分”という我<sup>が</sup>を捨てキリストに従い、キリストの死<sup>さま</sup>の様に等しくなること。その人はキリストの生命<sup>さま</sup>にあつて復活<sup>さま</sup>の様に等しくなり、人々に救<sup>そそ</sup>いを注ぎ、天国の群<sup>まね</sup>れの中に人々を招き入れることができる。

【わたしは、神に対して生きるために、律法<sup>りっぽう</sup>に対しては律法によって死んだのです。

わたしは、キリストと共に十字架につけられています。

生きているのは、もはやわたしではありません。

キリストがわたしの内に生きておられるのです。

わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身<sup>ささ</sup>を献<sup>ささ</sup>げられた神の子に対する信仰によるものです。】

(ガラテヤ 2章)

おのれ  
己に死に、キリストに生きていったパウロを通し何が起こったか・・・  
それは、世界中の人々の知るどころである。

ちっぽけな自分という殻<sup>から</sup>を脱<sup>だつ</sup>し、キリストに埋<sup>まい</sup>没<sup>ぼつ</sup>し、キリストに生きる時キリストの霊<sup>はたら</sup>を、しかも殉教<sup>びと</sup>の霊を人々に注ぎゆく働き人となることが可能となる。

日本での最初の殉教者(日本26聖人)、九州長崎の西坂の丘に26本の十字架が立てられ、キリストのために血を流していった光景は、なぜか見えるように私達の心をとらえている・・・。

本来ならその中に高山右近が加えられるはずであったが、石田三成の処置で、その光栄にあずかれなかったことを右近は悲しんだという。

しかし、信仰<sup>ゆえ</sup>故に祖国さえ追われ、キリストの定められた道を、殉教者の心<sup>た</sup>を絶<sup>い</sup>えず抱<sup>いだ</sup>きつつ、ルソンの地マニラで殉教的死<sup>と</sup>を遂げ、キリストの栄光を現し、信仰者<sup>もはん</sup>の模範を残していったことは、私達の心から消え去ることはないであろう。

あと一年後には右近没400年を迎えようとしている。  
日本のキリシタンの殉教愛に満ちた足取りの中心に、高山右近がいたことをもう一度思いおこしたい。

【こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびたしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競争を忍耐強く走り抜こうではありませんか、信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。  
このイエスは、御自身の前にある喜びを捨て、恥をもいとわないうで十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右にお座りになったのです。】

(ヘブライ 12章)

【だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができますよう。  
艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。

「わたしたちは、あなたのために 一日中死にさらされ、  
屠られる羊のように見られている」と書いてあるとおりです。

しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を取っています。

わたしは確信しています。

死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。】

(新約聖書 ローマ 8章)

**殉愛キリスト教会**

牧師：山縣 實

〒920-0814 石川県金沢市鳴和町タ 210 Tel・Fax 076-251-2247

E-mail : jun-i-yamagata@ishikawa.email.ne.jp

URL : <http://www.ne.jp/asahi/jun-ai/christ-church/>